島崎藤村の山陰旅行と「山陰土産」

垣田時也

一

藤村の山陰旅行は、大阪朝日新聞社の原田譲次が[1]、島崎藤村、横山桐郎、小島烏水、新村出の四人の紀行文を「名家旅行記」と名づけて「大阪朝日新聞」に連載することを企画し、これに応えて藤村は山陰地方を担当、実施されたものである。

このため藤村は昭和二年七月八日の朝、この旅行記の挿画を作製するため東京から同行した次男の画家鶏二を伴って大阪を出発、篠山、柏原、福知山等を経て、その日は城崎温泉の「ゆとうや」旅館に一泊している。当時の城崎は大正十四年の大震災で全焼した町がようやく復興し、活気があふれるような状態であったという。翌九日は宿の若主人の西村六左衛門らの案内で円山川を舟で下り、河口の津居山湾を望む入江から瀬戸の日和山に登り日本海を眺望、下山して香住の大乗寺を訪ねて円山応挙やその弟子たちの画を鑑賞し、さらに岡見公園から再び日本海を眺め、風雪や怒濤からこの島国を守る「腰骨の根強さ」という思念をつかんだ。香住駅で岩美行の汽車を待つ少時に、偶然旧知の奥田医師に出会う。奥田医師とは、当時香住で内科、小児科を開業していた奥田豊[注2]で、岡山医専存学中文学に熱中し、自作の短篇小説をもって上京、東京麻布の狸穴に住んでいた藤村を訪ね教えをうけたことがあったが、大乗寺から香住駅への自動車中の藤村の横顔をみて驚き、新聞を見て藤村の山陰旅行を知り、あわてて香住駅にかけつけ、久し振りの対面となったのである。その夜は岩井温泉の「明石家旅館」に泊まり、奇習

で名高い「湯かむり歌」をきく。翌十日は早朝から船で浦富海岸の景勝を探訪、とくに「龍神洞」の神秘的な美に心ひかれる。その日昼食は浦富海岸の「観潮楼」でとり、午后四時頃鳥取にむかう。鳥取の宿は古風な「小銭屋」で、翌十一日腹具合を悪くして静養中に宿の老人から請われるままに、生まれて三日目というその初孫に「この世によい種をまく人とも成るやうに」という願いをこめて「種夫」という名を選んで贈る。十二日は鳥取の城跡や砂丘を見、上井に向う車中、白兎駅に大国主の神の古い神話を思い出す。そしてその夜は三朝温泉の旅館「岩崎」に泊る。宿の女中が持参した書画帖の中に友人田山花袋のものを発見する。十三日は車窓に大山を仰ぎながら下市や米子を経て午后七時頃に松江到着、宍道湖畔の「皆美館」に投宿。眺望のよい親切な宿に気をよくする。松江への途で、出雲は昔から夜見の国、死の国といわれて来たが、予想していた暗さはみられず「ちよつと他に見られないほどやはらかく明るい感じのする地方」であることに気づいた。十四日は旅の疲れをとるため宍道湖での舟遊びや訪問客の応対やらで、のんびりと一日を宿で静養し、十五日は早朝から境港に出、そこから岡田汽船の岡田丸で美保の関港にゆき美保神社に参拝し「美保館」にて昼食、午后、出雲浦海岸の七ッ穴や潜戸を探り、夜九時頃松江に帰宿。この日は終日、出雲神話の世界をその土地、その土地で実感し、「一体、山陰道を裏日本とは、どういふ訳でせう。大陸に向つた海岸の位置からいへば、こつちの方が表日本であつてい、訳ですね。」という新らたな認識すらもつにいたった。十六日は松江市内の二つの小学校を訪ね、小泉八雲の旧居や松江の千鳥城に歴史をさぐり、十七日、松平不昧公の遺愛の茶室「菅田庵」を訪ねたが、山荘の入口にある小径の風情に楽しい感動をうけた。翌十八日、朝霧に包まれた松江を去り杵築の出雲大社に参拝、千家邸で昼食の饗応を受け、夕方に石見の益田に到着、益田川の流れに臨んだ宿（紫明楼？）[注3]に泊る。十九日、朝食後、土地の人の誘いで医光寺に参詣、雪舟遺跡の庭に遠い中世の心が息づいているのに感動し、雪舟芸術の見事さを再認識する。続いて万福寺、また雪舟隠棲の跡である吉田の大喜庵を訪ね、さらに足をのばして高津町の万葉ゆかりの地である高角山に登り、人磨を祀る柿本神社に参拝し、社頭の観月亭で休息、白雲を背にした領巾振山を眺め人磨の相聞歌を思い起し、立ち去りがたい気持を抱く。午后一時頃、神社で昼食の饗応をうけ、午后四時頃に益田から津和野に向う。津和野では夜汽車が出るまでの僅かの時間をさいて、町長の案内で稲荷神社や嘉楽園、また幼年時代の森鷗外が学んだ養老館等々を自

動車であわただしくかけめぐり、その夜、小郡を経て帰途につき、この旅を終えたのである。

注

(1) 原田譲次。本籍は岡山県。明治十八年三月二六日生。早稲田大学英文学科卒業後読売新聞社入社。そのご報知新聞社に転じ、大正四年東京朝日新聞社に入社。大正十四年、大阪朝日新聞社に転勤し整理部長となる。大阪朝日新聞連載の「名家旅行記」の企画はこの時代のものと思われる。昭和九年編集局長。同十年取締役、同十一年常務、同十五年本社代表取締役、同二十年十一月十五日退職。戦時中の最も困難な時期に朝日新聞の代表として辛酸をなめつくしたことであろう。昭和三九年二月十日死亡。

(2) 奥田豊。内科、小児科の医師。現在八十四才、兵庫県豊岡市存住。岡山医専存学中文学にも熱をあげ自作の短篇小説を携えて東京麻布の狸穴の藤村宅を訪れ指導をうけた。藤村はその短篇を「中央文学」に推薦し掲載するよう配慮したという。山陰旅行中の藤村との出会いは香住町に開業医をしていた時の事で、香住駅での数分間の発車間際の立話で、胃をこわしいた藤村にゲンノショウコを飲むことを教えた。藤村とのことは『見聞覚書記』という著者の中の「ある出会い」にくわしい。

(3) 紫明楼。藤村が益田を訪ねた頃、最も立派な旅館であった。「山陰土産」に出てくる旅館についての文章から察すると、藤村の泊った宿はこの紫明楼ということになるが、現在は廃業して建物も残っていないため確認することは不可能である。

二

さて、この藤村の山陰旅行をもとにした紀行文「山陰土産」は、昭和二年七月三十日から同年の九月十八日にかけて、次男鶏二の挿画十六回分を含めて都合三十七回連載された。そしてこの「山陰土産」は同じころ「大阪朝日新聞」に連載された、横山桐郎の「富士裾野の蟲行脚」、小島烏水の「不盡の高根」、新村出の「南国巡礼」という紀行文とともに昭和二年十月二十日に同じく大阪朝日新聞社から発行された『名家の旅』に収録された。しかし藤村は『名家の旅』に載せるにあたり新聞に連載した初出稿に若干の加筆、削除を行い、十六回分に改稿したが、問題は後述する加筆部分に加え、八月十七日に鶏二の「浦富海岸の岩壁」という挿画とともに載せられた十四回目の「浦富海岸（續）」を全文削除したことである。これは

お前はこんな海岸が好いのか。多くの名勝の地としてもてはやさるる場所がたゞ〳〵旅客の眼にめづらしいやうに、こゝもまた奇景に富むといふだけの場所ではないか。お前は幾百年も前の昔の人が西湖とか瀟湘とかの風景をわが国にあてはめやうとして、支那人が支那の自然を見たやうにしか自分等の国の自然を見ることも出来なくなつたのに気づかない

のか。さういふ風景の見方が今だに多くの人達の内に変らずにあつても、お前はそれを不思議とも考へないのか。

ある人は斯う私にいふかも知れない。それにもかゝはらず、私はこの浦富海岸岸に来て、こゝにある空気を吸ひ、こゝにある日光を浴び、こゝにある朝風に吹かれ、あちこちの島の間を船でめぐつて見た時は、海上の庭園にでも身を置いたやうな楽しい旅の心地にかへつた。私は造花を大きな設計者に、こゝの海上の広い青々とした庭園の草地に、その草地に岩石ばかりを置いたところを東海岸に、淡かな松の緑なぞをあしらつたところを西海岸に見立てた。成程、こゝにあるものは所謂奇景だ。太郎兵衛島、松島鐘岩、獅子岩、猿飛岩、それから鴨か磯など、数へて来ると、あるものは海上にそばだち、あるものは腹這ひ、あるものは臥し、その形状は千変万化して窮りがない。斯うした奇景は、やゝもすると私達を飽きさせる。しかし、どんな自然の眺めの中にも飽きないものが残らう。その残つたものこそ私達が捉へたいと思ふものだ。その意味から、汲んで汲んでも盡きないやうな味のあるといふのは、たゞその風景が大きいからでもなく、めづらしいからでもない。岩壁といひ、洞窟といつても、私達の胸に来るものは畢境、石の美である。おそらく昔の支那人なぞが捉へたのもそれであつたに相違ない。私達形状のめづらしいといふことにばかり囚れないで、もつと別の眼で、斯うした海岸にあるものも見直さなければならない。

という部分で、このあとの十五回目の八月十八日に載せられた「浦富海岸(續)」のなかの「私達がこゝに見つけるものはむしろ岸に倚ふ添ふ島々の眺めであるのだから。」という浦富海岸独自の風光を強調するたぬの前奏的役割りをもたされているところなのである。しかし何分にも慎重な藤村の性格から考えて、この十四回目の紀行文が、土地の人々に誤って受けとられ、いらぬ刺激を与えはしまいかと危惧したためか、あるいは、また、この一文のなくもがなの冗漫さを嫌ったためか、あっさり全文を斬りすてているのである。

問題はこれだけではない。昭和二十七年二月十六日の朝日新聞の「文芸小旅行」(注4)というシリーズの二回目に藤村の「山陰旅行」を取りあげ、すでにのべた奥田豊医師のこれに対する証言をのせている。それは

「……またこの〝山陰土産〟の短文中に二つも間違っているところがあることも本を読んで知ったが、べつに訂正を申込むほどのことでもないので、そのまゝにしている」とのこと。内科医の奥田氏を小児科産婦人科医に仕立てている

ところと、香住でおいとましようとした西村氏が藤村から岩見行の二等の切符をだまって渡されたので、これはついて行かねばならないと思い、おともしたことが、本文では何と城崎の油とう屋の若主人が「岩井まで一緒にいってくれるのを強いて辞退しかね」「こゝまで案内してきたついでに岩井まで見送ろうではないかと若主人はいった」という風に書いてあったというのである。

というところである。別に取りたてていう必要のない部分なのだが、藤村のこの山陰旅行が、昭和二年の七月八日の大阪出発にはじまり同月の十九日に旅を終え、同じ七月の三十日から九月の十八日にかけて、早速に「山陰土産」と題してこの旅行記を大阪朝日に連載したところからみると、内科医の奥田医師を小児科産婦人科医に仕立てているところはともかくとして、西村若主人の岩見行の件については記憶違いとか、忘れて間違ったというほどの時間的距離などなかったのだから、これは藤村の作意が働いたととるのが自然ではなかろうか。ということは、この部分と同様に藤村は他のところでも同じような虚構を行うことによって、旅行の作品化という意志を働かせたはずで、それは今後の検証によってもっと明らかになるのではなかろうかという期待を抱かせるのである。もっとも、藤村が、かりにこうした作意をしてみたところで、この紀行文全体の流れが大きく変わるわけのものではない。然しこの「山陰土産」が、明らかに、藤村が山陰旅行から受けとめたものを、ある一つの意図にそって再編成した作品であるという当り前のことを、朝日新聞の「文芸小旅行」というシリーズ物が指摘していることだけは、確かであろうと思われるのである。

ついでにいえば、藤村は、昭和十三年に刊行した『藤村文庫』の第九篇「静の草屋」にこの「山陰土産」を収録する際に、また若干の訂正を行っている。そして定本版といわれるこの『藤村文庫』を底本として編集された筑摩書房版『藤村全集』第十巻所収の「山陰土産」についての解題には、こう記されている。

「山陰土産」は、はじめ、昭和二年（一九二七）七月三十日から九月十八日まで、五十回にわたって『大阪朝日新聞』に連載された紀行で、同年十月二十日に同社から発行された『名家の旅』に、次の三氏の紀行とともに収録された。横山桐郎「富士裾野の蟲行脚」・小島烏水「不盡の高根」・新村出「南国巡禮」。いずれも同紙に「名家旅行記」として連載されたものである。「定本版藤村文庫」では、第九篇「静の草屋」（昭和十三年十一月一日発行）に「山陰土産その他」として、「伊香保草」「京都日記」「仙壺の二日の三篇とともに収録され

ている。「伊香保草」は、「伊香保土産」の題で「京都日記」とともに第十三巻『桃の雫』に収められている。「仙昼の二日」は同巻の〝拾遺〟に収録した。本巻は、この定本版を定本とした。

なお、三九四頁「『鶏ちゃん、山一つ越すと……』以下の三行は、『名家の旅』によって補った。

簡潔にまとめられた見事な解題である。然し不思議なことにはこの解題の執筆者は大阪朝日新聞に連載された初出稿の「山陰土産」に眼を通してないのである。[注5] 大阪朝日新聞の連載は

七月三十日　（土）　一回　大阪より城崎
七月三十一日（日）　二回　大阪より城崎（續）
八月二日　（火）　三回　大阪より城崎（續）
八月三日　（水）　四回　大阪より城崎（續）
八月四日　（木）　五回　大阪より城崎（續）
八月五日　（金）　六回　城崎附近
八月六日　（土）　七回　城崎附近（續）
八月九日　（火）　八回　城崎附近（續）
八月十日　（水）　九回　大乗寺を訪ふ
八月十二日（金）　十回　大乗寺を訪ふ（續）
八月十三日（土）　十一回　山陰道の夏
八月十四日（日）　十二回　山陰道の夏（續）
八月十六日（火）　十三回　浦富海岸
八月十七日（水）　十四回　浦富海岸（續）
八月十八日（木）　十五回　浦富海岸（續）
八月十九日（金）　十六回　浦富海岸（續）
八月二十日　（土）　十七回　鳥取の二日
八月二十一日（日）　十八回　鳥取の二日（續）
八月二十三日（火）　十九回　鳥取の二日（續）
八月二十四日（水）　二十回　三朝温泉
八月二十五日（木）　二十一回　三朝温泉（續）
八月二十六日（金）　二十二回　松江まで
八月二十七日（土）　二十三回　松江まで（續）
八月二十八日（日）　二十四回　松江まで（續）
八月三十日　（火）　二十五回　境港と美保の関
八月三十一日（水）　二十六回　境港と美保の関（續）
九月二日　（金）　二十七回　出雲浦海岸
九月三日　（土）　二十八回　出雲浦海岸（續）
九月四日　（日）　二十九回　出雲浦海岸（續）
九月七日　（水）　二十回　宍道湖の旅情
九月八日　（木）　三十一回　菅田庵を訪ふ
九月九日　（金）　三十二回　竹矯より石見益田まで
九月十二日（月）　三十三回　雪舟の遺蹟
九月十三日（火）　三十四回　雪舟の遺蹟（續）
九月十六日（金）　三十五回　雪舟の遺蹟（續）
九月十七日（土）　三十六回　高角山
九月十八日（日）　三十七回　津和野まで

で、翌九月十九日からは新出出博士の「南國巡禮」になっており、解題にいう「五十回にわたって……」は、したがって何をさして五十回といったのか理解に苦しむのである。もっとも七月三十日から九月十八日にかけてのなかで、八月一日は朝刊の休刊日になっているため、朝刊の発行回数は五十回である。執筆者はこの五十回の朝刊の毎回に「山陰土産」が連載されたものときめこんで、大阪朝日の初出稿を確めないままに解題したのではなかろうか。このことは、この解題最後の二行

なお、三九四頁「鶏ちゃん、山一つ越すと……」以下三行は、『名家の旅』によって補った。

とあるところからも判然としている。つまり解題執筆者は、藤村が『定本版藤村文庫』第九篇に「山陰土産」を収録する際に削除した「鶏ちゃん、山一つ越すと……」以下の三行を『名家の旅』によって補うことにより、大阪朝日に掲載した初出稿と同じになったものと早合点しているのである。然し『名家の旅』所収の「山陰土産」は初出稿と同じものでないことはすでにのべた。

こうみてくると、藤村の「山陰土産」は、まず現在で最も権威ある藤村全集だと定評のある筑摩版で、解題執筆者の初歩的ミスによる不当な扱いを受け、また一方、一般的にこの山陰旅行がそのまま「山陰土産」になったものと受けとられて、そこには虚構の介在する余地などないものととられてきたが、然し藤村がこの「山陰土産」に藤村独自の意図を塗りこめ、『名家の旅』に、あるいに『定本藤村文庫』に収録に際して手を加えたとなると、淡々と山陰旅行をスケッチしたかにみえるこの「山陰土産」の解釈に、いってみれば全く違った地平が開けるといってもいいすぎではあるまい。

注 (4) 朝日新聞が「文芸小旅行」と名付けて、昭和二十七年二月十五日から昭和二十七年三月八日にかけて都合二十回分連載したものである。藤村の「山陰土産」はその第二回分として二月十六日(土)に掲載された。ちなみに第一回は三木露風の「ふるさと」で故郷の龍野市が、また第三回は林芙美子の「放浪記」で神戸市が取りげられている。

(5) 帝塚山短期大学鈴木昭一教授の指摘による。

三

明治三十年「若菜集」を出してから、昭和十八年「東方の門」執筆中に倒れるまで、半世紀に近い間、藤村は終始一貫自らを旅人とよび、旅人のあらゆる心を描いてきた作家であ

る。「旅人とわが名よばれん」この芭蕉の心は、藤村の生涯に深く根をおろしてゐる。

周知のように、これは亀井勝一郎の『島崎藤村』[注6]中の言葉で、藤村文学の本質の一つを見事に指摘した有名なくだりである。山陰旅行においても、藤村が客舎で土地の人々の求めに応じて書きしるした言葉は、きまって芭蕉の語であった。

○

古人のあとを求めず、古人の求めたるところを求めよと南山大師のふてのあとにも見えたり、はせをのことはより　藤

○

子が風雅は夏炉冬扇の如し、衆にさかひて用ふるところなし

はせをのことばをします　藤村

○

朝を思ひまた夕をおもふへし　藤

等々。[注7]したがってこの山陰旅行も「私は多くの旅人と同じやうに、浅く浮びあがることを楽しみにして東京の家を出て来たものである」と「山陰土産」の冒頭でのべているように、「旅人とわが名よばれん」という芭蕉の心をこころとしての旅であることに違いはなかった。

然し藤村にとって、明治の旅が、失恋と貧困の悩をかかえての、然もなお自らの文学をさがし求ぬる厳しい放浪の旅であり、また、大正の旅が、駒子事件による絶望と傷心をかかえての、然もなお新生を追い求める必死の漂泊の旅であったのにくらべ、この山陰旅行にはじまる昭和の旅は、著しくその性格を異にしていることに気付くのである。いうまでもなく、それは先ず第一に、印税の増収、わけても昭和二年三月に所謂円本の『現代日本文学全集』第十六篇として出版した『島崎藤村集』二十万部の稿料二万円の収入による、それこそかってない島崎家の生活の安定にくわえ、第二には、女性のための文学教養雑誌として発刊した「処女地」の編集助手をつとめる加藤静子への愛情がようやく実を結ぼうとし、理想的な老いの伴侶を得ることによる藤村の精神の余裕があげられよう。そしてそれらを背景にして、然もこの山陰旅行のスポンサーは大阪朝日新聞社だったのだから、藤村にとってこの旅は、行く先々の客舎が超一級[注8]であり、その上、土地の名士の歓迎攻めにあうという、おそらく今迄には考えられない贅沢な旅になったのもやむを得ないことであった。もちろん子煩悩な藤村である、画家を志す二男鶏二を同行してそのスケッチを自分の紀行文とともに新聞に掲載し、さりげなく我が子を社会に送り出そうとする配慮も忘れていないのであ

る。

したがって、この山陰旅行は、藤村がそれこそ長い人生にわたって営々と築きあげた人生と文学に対する厳しく豊かなものを、旅の各地で乞われるままに教え与える奥行きの深い余裕のある旅で、まさしく「名家の旅で」あったのである。だからその紀行文である「山陰土産」が、そうした藤村の姿勢を反映し、周到な準備と落着いた観察とがもたらす滋味あふれる、然も文明批評的色彩の濃い作品になったのも、また当然のことであった。

注 (6) 昭和十四年十一月二十日、弘文堂書房から初版が、その後、雑誌「新潮」に書きつがれたものを加えて昭和二十二年八月十五日、かに書房から増補版が出された。初版本の附記によると亀井勝一郎がこの「島崎藤村」を書くにあたっては「定本版」によっており、「この本に引用した藤村の文章は、殆んど定本版藤村文庫からのものである。文庫に収録されてゐない作品は、以前の単行本や全集によった。藤村文庫は、藤村自身の手によって昨年編纂されたもので、定本版にふさわしく周到であり、多くの回想や附記がついているから参考になることが多かった。」とのべ、年譜も同じく定本版第九篇の「静の草屋」巻末所収のものから、「必要と思はれる個所だけを抄萃編纂し直した。」とある。したがってこれは亀井勝一郎の「島崎藤村」論の性格の一面を物語る資料である。

(7) 筆者が調査したかぎりでは、藤村がこの山陰旅行の各地で乞われるままに揮毫した言葉は芭蕉のこれらの語録であった。

(8) 城崎「ゆとうや」岩井「明石家」鳥取「小銭屋」三朝「岩崎」松江「皆美館」益田「紫明楼」(?)

四

ところで、藤村のこの山陰旅行が、大阪朝日の原田記者の企画によるものであることは既にのべた。然しそれは、原田記者が山陰地方を指定しての旅行だったのか、それとも藤村が「名家旅行記」連載の依頼をうけ、自分で山陰地方を選んでの旅だったのか、ということが当然に問題になるが、これについての資料や記録が朝日新聞社に残されていないために、今となっては確認することが出来ないのが残念である。ただ「大阪朝日新聞」に連載された名家四人の原稿をまとめた『名家の旅』所収の横山桐郎農学博士の「富士裾野の蟲行脚」の〈はしがき〉に次のようなことが書きつけられている。

「東朝」のS氏が私を訪ねて、この夏「大朝」のために、どこでも希望のところへ一週間ばかりブラリッと旅行して貰ひたいといふことをいはれたのは、私が台湾の蟲行脚から歸つ

てまだ間もなくだつた。それから數日の後大朝のH氏が見えて、さきのS氏の依頼を繰返され、いよ〳〵約束がほゞ出来上つに。

と、したがって、これをみるかぎり原田記者は横山博士に旅の依頼はしたが、行き先の指定はなく、本人の自由にまかせていることがわかる。もっとも、これは横山博士の場合で、他の三人については、その紀行文中にこれに類する記事が見当らないため、同様の扱いであったと断定することは出来ない。然し横山博士だけが自由で、他の三人は行く先指定の旅というのも不自然だから、まずは同様の依頼を受けたと考えてもいいのではなかろうか。

そうなると、藤村が山陰地方を選んだという、その選びかたが、この旅の紀行文である「山陰土産」の性格に深くかかわってくることになる。[注9] 藤村は「山陰土産」の冒頭で、「山陰山陽方面には全く足を踏みいれたことがない。山陰道とはどんなところか。さう思ふ私は、多くの興味をかけて東京を發つて来た」とのべているが、表日本に対する裏日本の然も暗い日本海に面した悲劇の神話の世界への興味は、所謂新生事件によるフランスへの旅以来の藤村の人生と文学に対する一つの強い姿勢を示すものとみてよかろう。当然に、藤村は、「木曽谿日記」や「松島だより」また「眼鏡」や「熱海土産」等々の紀行文とは違って、日本への回帰のなかで、一層、歴史への傾斜を深めるのだが、然し藤村のユニークさは、だからといって重く深く歴史とその風土にかかわるのでなく「そんなに深く入つて見るつもりで、私はこの旅に上つて来たものではない。むしろ多くの旅人と同じやうに、浅く浮びあがることを楽しみにして、東京の家を出て来たものである」という芭蕉の「軽み」に通じるような方法で、この山陰旅行に終始していることに注目したい。[注10]

なぜなら、この「浅く浮びあがる」心による歓察が、山陰の神話と伝説の風土を全く新しい視野で捉える発見につながるからである。すなわち、死の国、夜見の国といわれてきた出雲を「旅の私達が出て行つたところは、暗い黄泉の國どころか、むしろその反対にちよつと他に見えないほどやはらかく明るい感じのする地方であつた。」とみる清新な把握がそれである。もっとも、藤村のこの旅が、死の国、夜見の国といわれる暗い厳しい山陰の冬ではなく、夏であったことも、これと大いに関係があろう。然し出雲を「やはらかく明るい感じ」と捉えたのは、いずれにしても藤村がはじめてではあるまいか。だからこそ「一體、山陰道を裏日本とは、どういふ譯でせう。大陸に向つた海岸の位置からいへば、こつちの方が表日本であつてい、譯ですね。」と

いう発想すらも生まるのである。然もこうした山陰の風土の以外なほどの「やはらかく明るい」印象は、もちろん、「名もないやうな土地の一隅までが、古い歴史をもつ」日本海岸独特の「腰骨の根強さ」に支えられてはじめて可能であるということも、藤村の炯眼は確実に見ぬいていたのである。いや、それほどに「深く入つて見る」よりも「浅く浮びあがる」思惟は、一層はば広い自在な認識に、ひとを誘いこむといった方がより適切で、その上、藤村は、その間の機微を、ながい苦闘の生涯で知悉していたはずだからである。

それゆえに藤村は山陰の山脈に「出来ることなら、海岸ばかりでなしにもつと山地の方まで入つて行つて、古代の人が、現世と黄泉の國との境であると想像したといふ出雲の伊賦夜（比良坂）のあたりを歩いて見たらばと思つて来た。比婆山の位置もはつきりしないとは聞くが、もしそんなところまで行くことが出来て、あの伊邪那美の神の墳墓の地を見たらばとも思つて来た。眼にある星上山の向うには、その比婆山も隠れてゐるといふことであつた。ここは古代の大陸との交通を想像させるばかりでなく、もつと古い神話にまで遡るなら、天地創造の初発の光景にまで、人の空想を誘ふやうなところだ。」と古代に遡上して神話への空想を大きく膨らませ、一方、高い山々に「添いながらのこの海岸の旅」で、「海の愛」がまた藤村の心に「活き返つて」、ひとを、その存在の根源に引きずり込むような海の「深い自然の力」に「私は幾年か前の外國の旅を思ひ出し、遠洋の航海の記憶を呼び起して、私達の疲れ切った筋力や神経までも清く新たにするやうな日光と海風とが身に浸み渡るのを覚えた。」のである。それは、いってみれば疲れ汚れた生命を清く新たにする「海の神秘」に、遠い古代から日本人の魂の源流である清浄なるものを深りあてたといっても、決していいすぎではなかろう。だから「旅も終りに近づいた」益田に近い高角山にある柿本神社の観月亭から日本海の「青い海」を遠望して、「私はここの山陰の旅に来て、城崎に近い瀬戸の日和山から、先づ望んだのもその海であつたことを胸に浮べて、これが最後に望んで行く日本海であらうと思つた。」のべた切々たる海への別離の言葉は、藤村が遥かなるフランスの旅から、ひそかに温め深めてきた海への思念を、ここ山陰に来て神話と伝説の原郷に、いかに見事に融けこませたかを物語っているのである。丁度、藤村が「夜明け前」の準備にかかったのが、この頃であるのを思いあわせると、古代の心を大和ではなくて出雲路に尋ねようとする意図には、霧の中から歴史を描くというこの大作の前奏的役割をも、ひそかに狙っていたということになるのではなかろうか。

とすれば芭蕉の「軽み」に通じるこの「淺く浮びあがる」方法は、あきらかに『夜明け前』にとりかかる藤村の独自の姿勢として受けとめてもよかろうと思う。

注 (9) 特に『夜明け前』との関連において

(10) 山陰旅行中、宿を訪ねる土地の名士の揮毫依頼に、藤村はそのほとんどを芭蕉の冒頭を書いている。

(11) 「山陰土産」には記紀に登場する出雲神話のほとんどが取りあげられているが、これは、いかに藤村が、周到な準備をしてこの旅に臨んだかを物語っている。

五

周知のことだが、「山陰土産」は藤村の山陰旅行の順序にそって書かれているが、然し旅の印象を徒然に漫然と綴ったものではなく、むしろ、かなりはっきりした意図をもって――もちろん大阪朝日新聞から同じように依頼をうけた横山桐郎、小島烏水、新村出ら三名を十分に意識して――旅の見聞を、随所に虚構をまじえながら、一つの作品として再構成したものだといてもよかろう。

「山陰土産」は大阪朝日新聞連載三十七回分のうち、先ず最初の五回分の「大阪より城崎へ」という摂津、丹波、但馬にあたる部分を序章のかたちで書き出し、七回目の「城崎附近」、つまり、あと一歩で山陰に足を踏み入れようとするところから本論に入るが、そこで、

城崎附近を流れる豊岡川は、丸山川ともいふ。案内記によると、この川の上流は丸山川、下流は豊岡川としてあつて、地図にもそのやうに出てゐるが、土地の人達はやはり下流までも丸山川と呼んでゐるのは、その名に親しみを覚えるからであらう。河口から入つてくる海の潮は、その邊から豊岡あたりまでもさかのぼるといふ。私達が岸に添うて出て行つた時は、眞水と潮水のまじる潮水の上にでも舟を浮べた心地もした。

と、瀬戸、日和山方面を深るため、「油とうや」の若主人等の案内で、円山川を舟で下った時の模様を書きとめたが、注意しなければならないのは「眞水と潮水のまじる潮水」という語句である。実は、藤村は、この語句を最終章の「津和野まで」の中で

津和野に来て見ると、こゝにはすでに長州の色彩が濃い。石見からするものと、長州からするものとの落ち合つたところが、津和野の津和野らしい感じであつて、ちやうど眞水と潮水との混り合つた河口の趣に似てゐる。長州の方からさし

て来る潮はこゝで石見の眞水と合ふ。おそらくかうした土地に見出さるゝものは、その邊の微妙な消息は、人の氣質にも、言葉にもあらわれてゐやう。私は自分の郷里が信濃の西のはづれにあつて、殆んど美濃に接近してゐるところからかうした津和野のやうな土地柄には特別の興味を覚える。その意味から、こゝを鷗外漁史の生地と考へて見ることもおもしろい。

とのべて、津和野は石見と長州との落ち合った、つまり「眞水と潮水との混り合った河口の趣」に似ているとして再度登場させ、前後見事に照応させているのである。然もこの部分は初出稿の大阪朝日新聞連載の三十七回目「津和野まで」には記載がなく、藤村が、これを『名家の旅』に収録する際に、わざわざ書き足し挿入したものなのである。そうなると、藤村は三十七回分の初出稿のうち、既にのべたように十四回目の「浦富海岸(續)」を切りすて全文を十六回分に編成しなおし、然も最終章十六の「津和野まで」にこの部分を挿入して、『名家の旅』版「山陰土産」を作成したことになるが、山陰部分の本論の展開を「眞水と潮水のまじる潮水」ではじめ「眞水と潮水の混り合った河口」で締めくくることによって、初出稿にくらべると一段と緊密で張りのある構造に止揚しており、いわば、そこに藤村の巧妙な狙いがあったということになろうか。

だが、「眞水と潮水と混り会」うということは、なにも城崎を流れる円山川や鷗外の生地津和野に限ることではあるまい。むしろ、藤村自身が「私は自分の郷里が信濃の西のはづれにあつて、殆んど美濃に接近してゐるところから、かうした津和野のやうな土地柄には特別の興味を覚える」と、のべているように、木曽から下がってくるものと、美濃から上ってくるものとの接点、つまり藤村の故郷馬籠こそ「眞水と潮水の混り合」うところなのではなかったか。然もそこに生を享け終生「血につながるふるさと」として、その馬籠を自らの文学の根源に、しっかりと据えることを忘れなかった藤村である。したがって「眞水と潮水の混り合」うというこの語句は、実は、藤村の生きかたにかかわる思想の根底に、どしりと横たわる生の原点と呼んでも差し支えはなかろう。

だから藤村は、この「山陰土産」の本論の展開を、先ず「眞水と潮水のまじる潮水」という、その生の原点からいかにもさりげなく香住の大乗寺へと読者を引き入れる。そしてあたかも「夜明け前」が、木曽路の深い山の中の馬籠の宿場町で、本陣の当主吉左衛門と年寄役の金兵衛が登場する近世の末頃からはじまるように、藤村は、そこで、円山応挙の絵を語ること、つ

まり近世を自分の生に重ねあわせるかたちで山陰路の第一歩の印象を、「好いものを見た」「楽しい旅の心持」と、「いつの間にか」にか」「應舉の眼を通して」「應舉が見たやうに」「あたりの自然を見る」自分の素直な感動を語ることから話しはじめるのである。

そして「名もないやうな土地の一隅までが、古い歴史をもつ」山陰へと歴史をひもとき、名勝史蹟を尋ねるにつれ、いつしか藤村の山陰の旅は、出雲神話の神々の世界に足を踏み入れ、古代と現代の往還に身を置くようになる。だから

「最早、出雲だ。」

思はず私は周囲を見廻した。遠い古代の人の想像がその時私の胸に浮かんだ。これから私が訪ねやうとする出雲地方とは、いはゆる夜見の國である。そしてその夜見の國とは、古代の人の想像した死の國である。

としるしながらも、藤村は「古代の人の想像した死の國」とは反対に、出雲は「ちょっと他に見られないほどやはらかく明るい感じのする地方」と、いかにも藤村らしい捉え方をするのであるが、この時、藤村は、水戸の浪士が通過した後のあわただしい馬籠をあとにして、同志とともに実施し、古学への思いを一層深めた父島崎正樹の伊那への小さな旅を思い出しはしなかっただろうか。藤村は「夜明け前」第一部第十一章の二の終り部分で

この小さな旅は、しかし平田門人としての半蔵の眼をいくらかでも開けることに役立つた。

「あはれ〳〵上つ代は人の心のひたぶるに直くぞありける。」

先人の言ふこの上つ代とは何か。その時になつて見ると、この上つ代はこれまで彼がかりそめに考へてゐたやうなものではなかつた。世に所謂古代ではもとよりなかつた。言つて見れば、それこそ本居平田諸大人が尋見した上つ代である。

……中　略……

國學者としての大きな諸先輩が創業の偉業は、古ながらの古に蹈れと教へたところにあるのではなくて、新しき古を發見したところにある。

そこまで辿つて行つて見ると、半蔵は新しき古を人智のまま〳〵進み行く「近つ代」に結びつけて考へることも出来た。とのべて、父島崎正樹の伊那行が「新しき古」の発見にあるという「夜明け前」の核心的部分に触れているが、それは藤村の山陰への旅で、出雲を「死の國」どころか「ちよつと他に見られないほどやはらかく明るい感じのする地方」と捉える発想と重なりつながるものがあるように思われる。こうなると藤村の「新しい出雲」の解釈は、壮大な「夜明け前」という叙事詩の

海に、潺湲と流れこむ一つ水脈だということも出来よう。

然し藤村のこの旅での収穫は、こうした出雲の神々の世界への新しい認識だけに終らなかった。出雲を去り石見の益田に辿りついた時、そこの醫光寺で見たものは、「遠い中世紀は、まだこんなところに殘つて、私達の眼の前に息づいてゐる」という驚きであった。それは雪舟の遺した石庭の「省けるだけを省いた」然も「静かに隠れてゐるやうな」「一切を忘れさせ」る眺めに、それを「心の庭」と受けとめる感動である。然もこうして雪舟とその遺園から藤村が受けとめたものは、一つには「雪舟の芸術に感ずるやうな石の美は、東洋的ではあっても、必ずしもそれが支那的であるとはいひきれないやうな氣」がし、「この石の國に來て、何となくそれらの關係を讀み得るやうに思つた」ということと、さらには「その人の愛した自然を抜きにして、製作のみを単純にいつて見ることの危いのをも感じた」ということを背景にしての驚きであり、感動であることを忘れてはならないのである。そして、いわば、こういう、いかにも藤村らしい中世の捉え方に、実は、昭和期を迎えて壮麗に展開する藤村の文学の方法の一端を、さりげなく垣間見せてくれているといってみても、言いすぎではなかろう。

さらに「同じ石見にある昔の人の跡とは言つても、畜僧としての雪舟と、歌人としての人磨とでは、遺したものが違ふ。したがって訪ねて行く私達の氣持も、おのずから異なるわけである。」と書きとめた藤村は、雪舟遺愛の医光寺や万福寺をあとして、同じ益田にほど近い高角山に人磨の遺跡を訪ね、中世から万葉の世界へと遡源している。そして、そこにある柿本神社の観月亭から領巾振山や高津川を眺め、海嘯のために流没したと伝えられる人磨終焉の地である鴨山に思いを馳せ、いつしか人磨の相聞別離の歌に藤村の思念を重ねあわせ「一層立ち去りがたい思ひ」を抱いている。それは人生という旅の伴侶として求めた再婚の相手である加藤静子を待ちわびる気持もあろうが、藤村の胸に深い傷痕を残した青春の日の佐藤輔子や、苦悩のうちに歿した妻冬への哀惜といってもいいのではなかろうか。いずれにしても藤村は、人磨への激しい追慕に、自らの過ぎ去った思いを重ねるかたちで、藤村の「古典と現代」を語っているのである。

こうして「表面に現はれたものよりも、むしろ隠れて見えないところにある」という山陰の歴史と風光をひもといた藤村は、この旅の終着点である石州と長州との接点津和野の城下町に来て、またいかにもさりげなく「眞水と潮水との混り合つた河口」という藤村の生の原点に、山陰の旅を収斂して「山陰土産」を

見事に締めくくるのである。したがって繰りかえしていえば、この紀行文は、山陰独自の歴史と風土とその芸術をとうして『夜明け前』につながる藤村の静かで然も鋭い姿勢を語ったきわめてユニークな作品であり、それがまた『名家の旅』の中で、他の三者の、ごく普通の紀行文を圧倒する重さがあるとみる所以なのである。

注　本稿を成すにあたり、朝日新聞大阪本社人事部の福本芳嗣氏、神戸新聞学芸部の宮崎修二朗氏、神戸市立中央図書館資料課の近藤秀男氏、また城崎郡香住町の香住神社田渕義直氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。